

小児食物アレルギーの最先端の研究成果

海老澤元宏 永倉 顕一 佐藤さくら 柳田 紀之

第72回国立病院総合医学会
(2018年11月9日 於 神戸)

IRYO Vol. 74 No. 10 (437-440) 2020

要旨

食物アレルギーの治療として研究レベルで進められている経口免疫療法に関して国立病院機構相模原病院臨床研究センターアレルギー性疾患研究部（当科）でのデータや過去の報告を紹介しつつ現状に関して解説する。ピーナッツおよび小麦によるアナフィラキシー児に対してピーナッツ 3g, 小麦はうどんとして200g相当, 牛乳は200ml, 加熱鶏卵 1 個を目標として寛解を目指して経口免疫療法を行ったところ, 摂取を続けていれば無症状で摂取できるが, 一定期間の治療中断で目標量を摂取できなくなることが判明した。さらに経口免疫療法中に生じる即時型症状の副反応もほとんどの症例で必発であり, 安全性を高める必要があった。また, ほぼ寛解状態として判断し長期経過をフォロー中にも症状誘発が認められていた。そこで寛解を目指すことは諦めて誤食によるアナフィラキシー対策として目標量設定を下げピーナッツ0.5g, 小麦はうどん 2g, 牛乳 3ml, 加熱鶏卵 1/32を目標として時間をかけた取り組みを開始した。その結果安全性は向上し, 脱落率も改善したが, 100%安全に実施できたわけではなく, 今後の研究の発展が期待されている。

キーワード 食物アレルギー, アナフィラキシー, 経口免疫療法

経口免疫療法 (Oral immunotherapy : OIT) は, 多くの食物アレルギー患者に対し原因食物の摂取を継続することで症状が出現しない状態 (脱感作状態) に誘導できる。しかし, 日常摂取量 (たとえば全卵 1 個, 牛乳200ml, うどん200g程度) を目標量とする OIT では, 連日で摂取していれば増量はできても副反応はほぼ必発であり, 時には重篤な副反応を呈する。近年, 抗IgE抗体を併用する OIT や目標量を低く設定する OIT など安全性向上への取り組みがなされている。本稿では各々のアプローチによる OIT について解説する。

日常摂取量を目標とする OIT の問題点

日常摂取量を目標とする OIT の主な報告に関して表 1 にまとめた¹⁾⁻⁶⁾。

<有効性>

鶏卵, 牛乳, 小麦, ピーナッツアレルギーへの OIT では, 多くの症例を脱感作状態へ到達させるが, 摂取を一定期間中断した後にも無症状で摂取可能 (Sustained unresponsiveness : SU) な状態へ到達できる症例は限られる。国立病院機構相模原病院 (病

国立病院機構相模原病院臨床研究センター アレルギー性疾患研究部 †医師
著者連絡先: 海老澤元宏 国立病院機構相模原病院臨床研究センター アレルギー性疾患研究部
〒252-0392 神奈川県相模原市南区桜台18-1

e-mail : mebisawa@foodallergy.jp

(2019年5月8日受付, 2020年10月15日受理)

Recent Advances of Food Allergy Research in Children

Motohiro Ebisawa, Ken-ichi Nagakura, Sakura Sato and Noriyuki Yanagida, Clinical Research Center for Allergy and

Rheumatology, NHO Sagami National Hospital

(Received May 8, 2019, Accepted Oct. 15, 2020.)

Key Words : food allergy, anaphylaxis, oral immunotherapy,